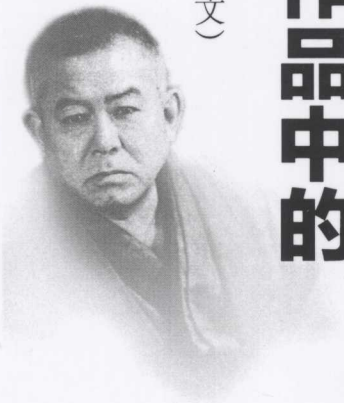
たにざきじゅんいちろう

谷崎润一郎文学作品中的侦探小说性格

（日文）

王 雪 著



知识产权出版社
全国百佳图书出版单位

本书是北京高等学校青年英才计划项目（Beijing Higher Education Young Elite Teacher Project）【项目编号：YETP0466】的阶段性成果。

谷崎润一郎文学作品中的侦探小说性格

（日文）

阜阳师范学院图书馆
藏书

王 雪 著

知识产权出版社
全国百佳图书出版单位

图书在版编目（CIP）数据

谷崎润一郎文学作品中的侦探小说性格：日文/王雪著.—北京：知识产权出版社，2015.12
ISBN 978-7-5130-3856-0

Ⅰ.①谷… Ⅱ.①王… Ⅲ.①谷崎润一郎（1886~1965）—侦探小说—小说研究—日文
Ⅳ.①I313.074

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2015）第 247176 号

内容提要

日本作家谷崎润一郎（1886—1965），不仅是唯美派文学大家，在侦探小说界，也享有崇高的声誉，被奉为日本侦探小说的“中兴之祖”以及“成为之后日本侦探文坛形成之原动力的人物”。继 1911 年的《秘密》之后，谷崎创作了许多在当时被称为侦探小说的作品，生前出版过三本侦探小说集。三个侦探小说集中的作品具有一个共通的特点，就是比起破解谜团、查出犯罪事件的真相，作品更注重想要破解，但还没有破解的阶段，因此最终形成了设定谜团、想要破解而最终不能破解这一具有侦探小说性格的模式。并且，这一模式不只存在于《秘密》《金和银》《人面疽》等前期作品中，在《痴人的爱》《卍》《春琴抄》《钥匙》等中后期代表作品中也反复出现。在这一视角下探讨谷崎文学独特美学世界的形成，对于打破既有的二元对立文学观以及拓展谷崎文学研究的新视角，具有很高的实践意义和理论价值。

责任编辑：冯　彤　　**责任校对**：孙婷婷
责任出版：刘译文

谷崎润一郎文学作品中的侦探小说性格（日文）

王　雪　著

出版发行：	知识产权出版社有限责任公司	网　　址：	http：//www.ipph.cn
社　　址：	北京市海淀区马甸南村 1 号（邮编：100088）	天猫旗舰店：	http://zscqcbs.tmall.com
责编电话：	010-82000860 转 8386	责编邮箱：	fengtong@cnipr.com
发行电话：	010-82000860 转 8101/8102	发行传真：	010-82000893/82005070/82000270
印　　刷：	北京中献拓方科技发展有限公司	经　　销：	各大网上书店、新华书店及相关专业书店
开　　本：	720mm×960mm　1/16	印　　张：	12.25
版　　次：	2015 年 12 月第 1 版	印　　次：	2015 年 12 月第 1 次印刷
字　　数：	264 千字	定　　价：	38.00 元

ISBN 978-7-5130-3856-0

出版权专有　侵权必究
如有印装质量问题，本社负责调换。

謝　辞

本論文の作成にあたり、終始熱心なご指導を頂いた指導教官の北京日本学研究センター張龍妹教授、秦剛準教授、日本側の東京大学大学院総合文化研究科小森陽一教授に深謝の意を表する。終始あたたかいご指導と激励を賜り、本論文の細部にわたりご指導を頂いた白百合女子大学文学部国語国文学科高橋博史教授に深謝の意を表する。

有益なご助言を戴いた東京大学大学院総合文化研究科博士課程の渡辺英里氏、東京大学大学院総合文化研究科教員孫軍悦博士に感謝の意を表する。そして傅玉娟さんを始め 501 研究室のメンバーには常に刺激的な議論を頂き、精神的にも支えられた。ここに感謝の意を表する。

最後に，これまで私をあたたかく応援してくれた両親と家族に心から感謝する。

目 次

序章 …… 1
一 探偵小説と探偵小説的な作品…… 1
二 谷崎の探偵小説的な作品…… 11
三 先行研究と問題提起…… 14

第一章 〈別世界〉の喪失と謎解き——「秘密」論 …… 24
一 〈別世界〉と〈秘密〉…… 26
二 〈別世界〉の追求から〈秘密〉の喜びの追求へ…… 33
三 T女との〈別世界〉…… 42
四 〈探偵の目〉の獲得と〈別世界〉の喪失…… 48
五 探偵小説の謎解き構造…… 57

第二章 芸術の幻の世界の消滅と謎解き論理の相対化——「金と銀」論…… 72
一 二人の芸術家の欲望のあり方と現実世界における評価について… 77
二 幻の世界に耽っている青野と現実世界の評価に拘る大川…… 85
三 大川の殺人…… 92
四 謎解き論理の相対化…… 97

第三章 映画の幻の世界の確保と解けない謎——「人面疽」論 …… 102
一 〈人面疽〉の映画自体の怪奇性…… 104
二 女優百合枝が「不思議」がる会社の操作…… 109
三 会社の操作と〈人面疽〉の映画の謎…… 115
四 解けない謎について…… 123

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四章　「探偵」を放棄する「痴人」——「痴人の愛」論 …… 127
一　譲治の二重の欲望と「お伽噺の家」での生活…… 128
二　謎を持つナオミと「秘密探偵」になる譲治…… 136
三　謎の女と「痴人」の誕生…… 145
四　謎の幻の世界に耽溺していく「痴人」…… 154

終章 …… 161

参考文献　（出版年順）…… 173
論　文…… 173
単行本…… 184
雑誌特集…… 189

序　章

一　探偵小説と探偵小説的な作品

谷崎は1911年の「秘密」を皮切りに、日本で一般的に探偵小説に分類される作品を数多く創作しており、生前三冊の探偵小説集が刊行された。1929年5月、新潮社から出版された『潤一郎犯罪小説集』、同年同月に改造社から出版された『日本探偵小説全集』の第五篇『谷崎潤一郎集』、及び戦後の1951年、三才社から出版された『前科者　谷崎潤一郎推理小説集』である[1]。三つの集に収録された作品は、主に大正期に集中しており、現在に至って探偵小説として一般的に認められている。ここで三つの集

---

[1] 『潤一郎犯罪小説集』(1929年5月、新潮社)には「日本に於けるクリップン事件」(初出「文芸春秋」(1927年1月))、「白昼鬼語」(初出「東京日日新聞」(1918年5月23日～7月10日)と「大阪毎日新聞」(同～7月11日))、「或る罪の動機」(初出「改造」(1922年1月))、「私」(初出「改造」(1921年3月))、「途上」(初出「改造」(1920年1月))、「前科者」(初出「読売新聞」(1918年2月21日～3月19日))、「黒白」(初出「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」(1928年3月25日～7月19日))の七篇が収められている。

『日本探偵小説全集　第五篇　谷崎潤一郎集』(1929年5月、改造社)には「秘密」(初出「中央公論」(1911年11月))、「柳湯の事件」(初出「中外」(1918年10月))、「或る少年の怯れ」(初出「中央公論」(1919年9月))、「人面疽」(初出「新小説」(1918年3月))、「金と銀」(初出「黒潮」(1918年5月)、「中央公論」(1918年7月原題「二人の芸術家の話」))、「呪われた戯曲」(初出「中央公論」(1919年5月))、「ハッサン・カンの妖術」(初出「中央公論」(1917年11月))、「途上」、「青塚氏の話」(初出「改造」1926年8月～9月、11月～12月)の九篇が収められている。

『前科者　谷崎潤一郎推理小説集』(1951年、三才社)には「柳湯の事件」、「人面疽」、「呪われた戯曲」、「日本に於けるクリップン事件」、「私」、「前科者」のほか、「或る調書の一節」(初出「中央公論」(1921年11月))も収録されている。

のタイトルに、それぞれ「犯罪小説」、「探偵小説」、「推理小説」が使われていたことに注目してほしい。どうして違う言葉で呼ばれていたのだろうか。大正期から昭和期にかけて、探偵小説という言葉はどういう意味で使われていたのだろうか。

これを明らかにするためにまず欧米における探偵小説の意味から見てみよう。

探偵小説はエドガー・アラン・ポー（1809-1849）に端を発し、コナン・ドイル（1859-1930）に至って欧米で創立された新しい文学ジャンルである。

探偵小説の創始者とされるポーは、自分の五篇の探偵小説に対して一度も「探偵小説」という名称で呼んだこともなければ、謎解きをする主人公を探偵と呼んだこともない。ポーの探偵小説は彼の構造重視の芸術観と直結し、彼の怪奇幻想文学から芽生えており、デュパンを主人公とした三部作――「モルグ街の殺人」（1841）、「マリー・ロウジェの秘密」（1842）、「盗まれた手紙」（1844）とデュパンもの以外の二篇「黄金虫」（1843）、「お前が犯人だ」（1844）、合計五篇しかない。が、この五篇は重要な探偵小説の殆ど全部の技巧と種類を網羅し、論理による謎解きという探偵小説の基本形式を創始したとされている。それは大衆に受けられなかったにもかかわらず、ガボリオ、デュ・ボアゴベ、ディケンズ、コリンズなど英仏の多くの作家に受け入れられていた。さらに英国をはじめ欧米各国の警察組織の設立及び改良に基づき一般民衆の警察活動に対する興味が高まるにつれて、探偵犯罪物語における探偵或はそれにあたる役が怪事件の謎を解く構造も次第に鮮明になってきた。そして、ホームズシリーズで大好評を博し、探偵小説を世界中に広めたドイルに至って、探偵小説は確固たる一ジャンルとして成立した。

ポーやポー以降のガボリオなどの探偵小説に比べ、ドイルのそれは「犯罪者とそれを取り締まる警察／探偵がはっきり二項対立をなすという共

通の了解」[1]が成立したとか、また自己探求の心理的葛藤の描写が一切取り除かれた[2]とかといった特徴を持っている。が、ポーに端を発した論理による謎解きという探偵小説の基本構造は、ドイルによってそのまま受け継がれ、強化されるばかりである。ゆえに、ドイルのホームズシリーズのような、探偵による奇怪な〈秘密〉＝犯罪事件の謎解きへの描写が主体となったものこそ、純粋な探偵小説だと見られてきた。ドイル以降の長い時期、このようなドイルに代表されたものは、欧米における探偵小説の主流だとされてきたのである[3]。

そして、周知のように、日本で探偵小説が一ジャンルとして成立したのは江戸川乱歩や横溝正史などの専業探偵小説作家が登場し、活躍した

---

❶　富山太佳夫『シャーロック・ホームズの世紀末』青土社（1993年11月第一刷発行）1995年3月第三刷発行　98頁。犯罪者とそれを取り締まる側の峻別はイギリスにおける首都警察システム生成と深く関わっている。同書99-105頁を参照ください。

❷「これら英仏の諸作家（ポー以後ドイル前期のガボリオ、デュ・ボアゴベ、ディケンズ、コリンズなど）はその創作態度の根底において、ポーのそれとは全くその質を異にしていたのであった。即ちポーが飽くまで短篇作家の精神に徹し切っていたのと同程度に前者の群は長篇作家であった。しかもその作品は、近代科学の長足の進歩に伴って急速に変貌して行く社会制度の一端として新機構の下に面目を一新した警察組織に刺戟されて一般社会人が漸次関心を寄せるに至った犯罪捜査方法に対する興味を、従来古くから行われて来た冒険小説や当代において新しく台頭して来たブルジョア社会風俗小説の手法上に利用したのに外ならないのであった。したがって彼らの興味は常に当代の道徳、風習、社会問題に注がれ、専ら作中人物の性格の相違や相克によって醸し出される葛藤の描写に努力が払われて、いかほど複雑を極めた興味深い探偵物語が生み出され得る可能性がある場合でさえも、物語全体を一貫する単一純粋な犯罪探偵の物語だけに止めて置くことは出来なかった。かくの如く複雑な構成内容から形作られた六十年代の所謂「煽情小説」"Sensational Novels"」である。二ノ宮栄三「英米探偵小説の発展（第一部）古代より一九二〇年まで」『文學部論叢』1953年11月　40-41頁。

❸　この点についてフリーマンやナルスジャックが証言できる。「探偵小説ははっきりと規定された構造を持っている」。まず、「探偵小説の主要な駒がチェスボードの上に並べられたのである。（一）謎をはらむ犯罪、（二）探偵、（三）捜査である」（ボワロ＝ナルスジャック『探偵小説』篠田勝英訳　白水社　1977年7月10日発行　26頁）。それから、フリーマンの有名なエッセイ『探偵小説の技法』（1924年）によると、「探偵小説の構成は以下の四つの段階を経なければならないのだった。（1）問題の提出。（2）解決を発見するのに本質的に必要なデータの呈示。（3）捜査の展開と解決の呈示。（4）手がかりの吟味と証明。このような構造は古典的なものとなっていて、フリーマンから現代まで、すべての本格探偵小説中に見出すことができる」（ボワロ＝ナルスジャック前掲書　57頁）。

昭和時代である。昭和25年の「探偵小説の定義と類別」で、江戸川乱歩は「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である」という定義を下している[1]。江戸川乱歩が下したこの定義は、英米の正統的な探偵小説のそれと通底しているだろう。

しかし、この定義は果して谷崎の、探偵小説と見られた一連の作品に適用するだろうか。

前述した三つの集の中で『潤一郎犯罪小説集』の成立経緯は、昭和4年2月谷崎から中根駒十郎に宛てた書簡によって大体の様子が窺える。

（昭和4年2月3日新潮社方中根駒十郎宛）

御手紙拝見いたしました

扉の文字のことと承知いたしましたがまだ別封郵便物ならびに検印紙が本日（三日）までに届いて居りません、届き次第に御送りいたします

それから別に「潤一郎犯罪（或ハ探偵）小説集」と云ふやうなものを同じ叢書にして出版してもらへますまいか、昨年「朝日」へ連載した「黒白」はあれだけでも単行本になるのですが、自分として少し気に入らないので差控へてゐましたけれど、御承知の普請で金が入るので背に腹はかへられず、さう云ふ題名の下になら加へてもいいと思ひます、その外もう一つまだ単行本に入れない短篇もあり材料は余るくらゐ沢山あるのです

それで負債はどのくらゐあつたか知れませんが（長篇小説集のは別として）それは情痴集の方で返すとして、此の集の方の第一版の印税を貸して頂ければ好都合なのですがいかがでせうか、御考へ願

[1] 江戸川乱歩「探偵小説の定義と類別」『江戸川乱歩全集15幻影城（正・続）』講談社　1972年4月第二刷発行　27頁。

ひます、少々都合もありますので至急御返事下されバ幸甚です

（昭和４年２月９日新潮社方中根駒十郎宛）

御返事拝見、それでは早速ながら左に目録を作つてみました。

黒白

白昼鬼語

前科者

或る罪の動機

私

途上

日本に於けるクリツプン事件

此にて大体七百枚あると存じます足りなければ又加へます。此のうち黒白と白昼鬼語と前科者と「クリツプン事件」とは本日小包にて発送しました。「或る罪の動機」は単行本に未発表のものにて矢張り「改造」の大正九年か十年頃の正月号（?）にあると思ひますから捜して下さい。長いものではありませんから写しても訳はありません。

「私」と「途上」とは新潮社の単行本に二度も出してゐるのですが、私の犯罪小説の中では最もすぐれてゐるもの故、これはそちらに本があると思ひますから、原稿は送りません。枚数を御しらべになつた上で今一度御しらせ下さい。順序はその時考へます。

校正は初校だけ送つて下さい。金は大阪市東区高麗橋三丁目第一銀行支店小生当座預金の方へ御払ひ込み下さると同じに小生へ電報にて御しらせ下されば甚好都合です。但し五千部の印税に願度、（それ以下では困るのです）金額も御通知願ます。

以上取り急ぎ要用のみ申入れます。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（昭和4年2月25日新潮社方中根駒十郎宛）

電報拝見いたしました

順序を

1 日本に於けるクリツプン事件

2 白昼鬼語

3 或る罪の動機

4 私

5 途上

6 前科者

7 黒白

右之通りに願ます

猶々なるべくならば追加なしにこれだけにて出版願度、しひて加へるならば「金と銀」が最も適当ですが、これハ百枚以上の長篇ですから厚くなりすぎると思ひます、次に戯曲でよろしければ「白日夢」と云ふ四十枚程のものがあります、たつた一度あまり売れなかつた単行本に出ただけですし、一つぐらゐ戯曲か這入つてもよくはないかと思ひます、舞台に実演出来るやうなものではなく、全くのレーゼドラマですから、戯曲体の小説として扱ったら差支ありません。これを加へる場合にハこれを7とし、「黒白」を8とすること、

右要用まで[1]（『谷崎潤一郎全集』第二十六巻　194-198頁）

以上から見れば分るように、『潤一郎犯罪小説集』は事前の企画がなく、「まだ単行本に入れない」ものを「さう云ふ題名の下になら加へてもいい」という谷崎の思いのもとで成立したのである。書簡の内容を発行された本の出来栄えと照らし合わせてみるとわかるように、集の題名から作品

[1]『谷崎潤一郎全集』第二十六巻　1983年11月初版　194-198頁。本論以下の谷崎の作品からの引用にあたって、基本的に原文のまま旧字を用い、適宜新字に改めた。

の選定、配列の順序まで、全く谷崎の考えどおりに運ばれたのである。

書簡によれば、これらの作品を集めた集の題名を結局「犯罪小説集」にきめたが、当初は「探偵小説集」との案もあったのである。具体的に各作品の内容を見れば、「日本に於けるクリップン事件」はマゾヒストの殺人を取り上げている、「白昼鬼語」は殺人事件の現場を眺め、憧れさらに演じた友人の園村の話である、「或る罪の動機」は善良な博士を殺した犯人の心理を探るもので、「私」は窃盗事件の犯人が自ら語り手とするものである、そして「途上」はプロバビリティの犯罪を扱うことから、江戸川乱歩に高く評価されたもので[1]、「前科者」は金銭と関係のある悪事を繰り返し、結局入獄した悪の芸術家の心理を追及する作で、「黒白」は主人公の小説家水野が、作品の中での殺人が現実で起ったため、殺人の嫌疑が懸ってしまう話である、つまり選ばれた作品は総べて犯罪と強くつながっている。題名を「犯罪小説」にしたのは、この特徴に注目したからだろう。が、谷崎が「探偵小説集」とも呼んでいることは、「探偵小説」が「犯罪小説」をも含んで使われていたことを示しているだろう。

他方、同年同月に改造社から出版された『日本探偵小説全集』の第五篇『谷崎潤一郎集』には「探偵小説」が使われている。この本は改造社の委託で江戸川乱歩が編集したもので、すでに探偵小説の専門作家となった江戸川乱歩の選択のもとで、「秘密」、「柳湯の事件」、「或る少年の怯れ」、「人面疽」、「金と銀」、「呪われた戯曲」、「ハッサン・カンの妖術」、「途上」、「青塚氏の話」の九篇を収めている。

同じ年に出版された、二冊の本を比べると、収録された作品は「途上」以外に全く重ならない。そして『日本探偵小説全集　第五篇　谷崎潤一郎集』に収録された作品の中で、「秘密」、「柳湯の事件」、「或る少年の怯れ」、「人面疽」、「金と銀」、「呪われた戯曲」と「途上」は犯罪に関わるとい

---

[1] 江戸川乱歩「日本の誇り得る探偵小説」『新青年』1925年8月増。

えるが、「ハッサン・カンの妖術」と「青塚氏の話」は変態、怪奇、幻想的な要素が強いといえよう。

また、この『日本探偵小説全集』の第二十篇として『佐藤春夫・芥川龍之介集』(1929年6月)が出ている。佐藤春夫集は「指紋」、「オカアサン」、「時計のいたづら」、「痛ましい発見」、「女誡扇綺譚」、「アダム・ルツクスが遺書」、「家常茶飯」と「陳述」の八篇が収められ、芥川龍之介集は「開化の良人」、「開化の殺人」、「妙な話」、「黒衣聖母」、「影」と「奇怪な再会」の六篇が収録されている。『佐藤春夫・芥川龍之介集』には「指紋」や「開化の殺人」のように殺人を扱ったものもあれば、「オカアサン」、「時計のいたづら」、「痛ましい発見」、「家常茶飯」のような犯罪事件より謎に纏わる幻想が強いものもあり、また「妙な話」、「黒衣聖母」、「影」と「奇怪な再会」のような怪奇趣味のものもある。

こうして見れば、大正から昭和の初めにかけての「探偵小説」は、「犯罪小説」と重なりつつ、さらには怪奇、幻想的な要素の強い小説も含んでおり、後に江戸川乱歩が定義した探偵小説より明らかに意味が広いだろう。

1924年8月の「新青年」増刊に掲載された「探偵小説小論」において、佐藤春夫は探偵小説を二通りに分類し、「その一つは実際家らしい頭脳が土台になつた推理判断、もう一つは神経衰弱的直感の病的敏感による」のだと述べている。

> 探偵小説だと言つても要は文学だから矢張り美の追求が欠けてゐては駄目だ。ロマンチツクな感興が湧いてくるやうなものでなければ満足を得るとは言はれない。(中略)
>
> コーナン・ドイルのシヤロツク・ホームズ叢書などは、ディティクティヴストーリーの傑作であらう。芸術としてなかなか捨て難い立派な作品が少なくない。(中略)

> 要するに探偵小説なるものは、やはり豊富なロマンチイシズムといふ樹の一枝で、猟奇耽異の果実で、多面な詩といふ宝石の一断面の怪しい光芒で、それは人間に共通な悪に対する妙な賛美、怖いもの見たさの奇異な心理の上に根ざして、一面また明快を愛するといふ健全な精神にも相ひ結びついて成り立つてゐると言へば大過はないだらう。[1]

所謂純文学作家として、佐藤春夫はドイルに代表される理性での謎解きを中心とするものを健全派に入れ、ある程度その芸術的な価値を認めている。が、謎解きが探偵小説の特徴の一つだと認めていながらも、佐藤春夫は「病的」、「猟奇耽異」、「怪しい光芒」といったポー的な怪奇的な側面こそ探偵小説の根本だと主張している。しかもこのよう見解は佐藤春夫の個人的なものではない。1920年に創刊され、探偵小説専門誌とまで目される雑誌『新青年』の目録において、探偵小説として取り扱われる翻訳や創作等に、単純な謎解きを中心とするものが少なく、それより異常変態、怪奇趣味、幻想趣味と交じり合っているものが主流であった。

このことから見れば、日本では大正期を通じて、純探偵小説たるものと、怪奇・幻想・恐怖小説たるものとを問わず、一様に「探偵小説」と呼ばれていたことが分かるだろう。

それから、戦後の1951年に三才社から出版された『前科者　谷崎潤一郎推理小説集』についてである。周知のように、日本で「探偵小説」が戦後「推理小説」に改称された。それは、1946年11月に内閣訓令で公示公布された当用漢字表に「偵」という漢字が外されたからである。「偵」という漢字は1954年3月当用漢字補正案に再び加えられたとはいえ、「推

[1] 佐藤春夫「探偵小説小論」「新青年」増刊　1924年8月　81頁。

理小説」という名称が既に広く使われるようになったため、その後長く両者は同義語として定着したのである。つまり、1951年の時点で「推理小説」は「探偵小説」の代用であった。

そして『前科者　谷崎潤一郎推理小説集』は「柳湯の事件」、「人面疽」、「呪われた戯曲」、「日本に於けるクリップン事件」、「私」、「或る調書の一節」と「前科者」七篇が収められ、前の二つの集とそれぞれ三つ重複して、それ以外「或る調書の一節」だけが新しく挿入された。つまり、前の二つの集を引き継ぐ姿勢を取っているといえる。

このように、「探偵小説」の意味、使い方が歴史的に変化していくにつれ、谷崎の探偵小説と見られた一連の作品が、「犯罪小説」とも、「探偵小説」とも、「推理小説」とも呼ばれたわけである。

近年、探偵小説と近代文学との関係を再検討する風潮の中、谷崎の、探偵小説と見られてきた一連の作品を探偵小説のワクの中で再評価する傾向が割合に強くなった。しかし、探偵小説というジャンルが形成されていった大正時代に書かれた一連の作品を、江戸川乱歩の定義した探偵小説のワクにいれて見ることには疑問がある。後に出てくる定義で前の作品の分類を判定することになるからである。実際、「途上」を探偵小説と断定する江戸川乱歩、中島河太郎の読みに異議を唱える論❶や谷崎をはじめとする〈純文学の作家たち〉の探偵小説に「反探偵小説」の兆しを見出した論❷、さらに谷崎の作品を論じるとき江戸川乱歩の探偵小説の定

❶ 横井司「谷崎潤一郎の「途上」を読む」『文研論集』 1991年9月。

❷ 内田隆三は『探偵小説の社会学』の中で、探偵小説は「不安の消費を通じて、近代社会の社会性が再確認され、権力の監視機能が中継されるという側面が」ある、「探偵というのは権力の眼の巧妙な代理人である」と指摘し、「谷崎や、佐藤春夫、芥川龍之介ら（純文学の作家たち）のミステリーでは、「犯人」「探偵」「語り手」の同一性の混乱により、探偵小説の可能性自体が不安定な状態に置かれる。探偵小説史家はこれらの文豪が探偵小説に参入するのを歓迎しているが、彼らの作品は「反探偵小説」の兆しを含んでいる」と主張している。内田隆三「猫と探偵と二十世紀」『探偵小説の社会学』岩波書店　2001年1月第一刷発行　4、38、42-43頁。

義の曖昧さを批判する論[1]が現れている。本論は谷崎のどの作品が探偵小説であるかと線引きしようとすることを止め、谷崎の、「探偵小説」と見られてきた一連の作品を、江戸川乱歩の定義した探偵小説と区別するために、「探偵小説的な作品」と呼んで検討していきたい。

二　谷崎の探偵小説的な作品

谷崎の探偵小説的な作品を発表順に簡単に紹介すると以下のとおりである。

「秘密」(初出「中央公論」(1911年11月))は「十一二歳の頃」経験した〈別世界〉を求めようとするため、浅草の松葉町で〈隠れ家〉を構えた〈私〉が、〈秘密〉への追求を通して夢のような〈別世界〉を見つけだそうとし、一時的にそこに入っていったが、結局〈秘密〉への執着で失敗した話である。

「ハッサン・カンの妖術」(初出「中央公論」(1917年11月))は小説家の〈私〉・谷崎がハッサン・カンの妖術を体験した話であり、〈私〉が魔法の世界に入ったまま作品は終わる。

「前科者」(初出「読売新聞」(1918年2月21日～3月19日))は前科のある悪徳の芸術家の心理を探る話である。

「人面疽」(初出「新小説」(1918年3月))は〈人面疽〉の映画に纏わる複数の謎を提示しており、女優の百合枝と技師Hの追及でなお新しい謎が現れ、最後、乞食の青年の俳優と〈人面疽〉の映画の製作者はどこの誰だろうかという謎を解くことができないまま終えられている。

「金と銀」(初出「黒潮」(1918年5月)、「中央公論」(1918年7月原題「二

---

[1] 森岡卓司「探偵小説と変形する身体—谷崎潤一郎「白昼鬼語」と江戸川乱歩「鏡地獄」」吉田司雄『探偵小説と日本の近代』青弓社　2004年3月第一刷。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com